

作物名：水稲

病害虫名：紋枯病（病原：*Thanatephorus cucumeris*）



病斑



菌核

1 被害の特徴と診断のポイント

幼穂形成期頃から発生が目立つようになる。葉や葉鞘に周縁部が緑褐色ないし褐色で、内部は灰緑色ないし灰白色の楕円形の大きな病斑を生ずる。病斑は下位葉鞘から現れはじめ、しだいに上位葉鞘に及び、激しいときには止葉の葉鞘や、葉あるいはみごまで侵される。病斑上には、初めは白色で後に褐色になる菌核(直径2～5mmの半球形)ができ、罹病茎には白い菌糸がくもの巣状に張る。

2 伝染源及び伝染方法

病斑上にできた菌核が秋に地面に落下し、越冬する。翌年代掻き、田植え時に水面に浮上し、イネの株元に着き、気温が22～23℃を超え、株間湿度が高くなると、葉鞘内へ侵入し始める。菌核からでた菌糸は葉鞘合わせ目から入り、菌糸塊を作って侵入菌糸を出し、病斑を形成する。病斑からは菌糸が伸びて隣接の茎葉に付着したり、葉鞘をつたって上方に伸び、新しい病斑をつくって感染していく。

3 発病・伝染好適条件

- ・幼穂形成期をすぎた頃...イネの抵抗力が低下し、さらに気温及び株間の湿度が高くなって発病に好適となり、急速に蔓延する。
- ・高温、多湿、多窒素、早植栽培。

4 防除方法

(1) 要防除水準

減収率5%を許容水準とすると、穂ばらみ期の発病株率が中生種で15%程度、晩生種で20%程度。

(2) 化学的防除

- ・播種前に箱施用剤を育苗床土に混和、もしくは播種時に育苗箱の上から散布する。
- ・穂ばらみ期から出穂期に、茎葉散布剤を株元によくかかるように散布する。
- ・穂ばらみ期に散布できる水面施用剤もある。
- ・多発ほ場や登熟期間中の降雨日数が多くなると予想され、病勢の進展が懸念される場合は、穂揃い期頃に追加防除を行う。

5 出典

(1)参考文献：宮城の稲作指導指針【基本編】

日本植物病害大事典（全国農村教育協会）

(2)写真：宮城県病害虫防除所撮影